『カネと人生』（くらしの文化人類学 5）

小馬　徹編著

雄山閣出版　2002年11月25日（290頁）

カネには生来縁遠く，今後も（まず確実に）無縁な者が世間と後生を恐れずに編んだ，カネについての本。著者もまた，カネに縁のない老若の人類学者たち（と一人の社会学者）です。と，ここまで書いてきて，もうとっくに愛想づかしされてしまったに違いありません。でも，乗りかかった船。一応，以下に内容紹介を試みてみましょう。

今日，資本主義という単一の世界システムが全地球を飲み尽くしたように見えます。しかし，カネ（全目的的貨幣）が塩や家畜などの伝統的な（限定目的的）「貨幣」に取って代わり，暮らしの隅々に浸透したのは，多くの地域では比較的最近のこと。それ以前は，暮らしに埋め込まれた全体的交換の「負債－義務」連鎖が社会関係を作りだし，経済ばかりか，倫理や法も規定する暮らしの柱となって，共同体を統合してきました。

確かに，あらゆる価値を通分するカネは，生産と消費を分離して伝統的な人間関係のしがらみから人々を解放し，自由を与えました。でもそれは，特定の相手との固有の関係を作りだすためではなく，利得それ自体を目的に再現のない物欲に衝き動かされ続ける交換と，（今や私たちには馴染みの）孤絶した生が地球の隅々にまで広がる端緒ともなりました。

世界各地の多彩な暮らしに直に，しかも深く接してきた人類学者たちが，自らの体験を見つめ，逸話を重視し，自らの思いを包み隠さずに，自由に筆を揮った書物です。

（売れ残りも省みないで）うーんとお得な値段に致しました。ご一読頂ければ幸甚。懐がちょっと寂しくなる分以上に，豊かな気持ちになって頂けます（でしょう）。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『日本人の精神構造―伝統と現在―』

寺沢　正晴著

晃洋書房　2002年12月（315頁）

こうして始めてみると，う～ん，自著紹介などというものは，もしかすると，自己紹介以上に難しいことなのではないかと感じている。そこで，本の目次を書いてみることにした。

〈目次〉

まえがき

第一部　日本人の現在

第一章 現代日本の笑いの状況

第二章 “パンツ論争”洗い直し

第三章 Jリーグの社会心理学

第二部　日本人の伝統

第四章 〈義理・人情〉考

第五章 《羞恥》の構造

補章（一）日本人の内と外

補章（二）日本における公と私

第三部 伝統から現在へ

第六章 戦後日本のナショナリズム

第七章 戦後日本人の韓国観

第八章 “おじさん”はどう変わったか

第九章 日本人の「死に方」考

第十章 現代日本の幸福

あとがき

＊　　＊　　＊

御覧のように，本書は，「日本人の精神構造」の「伝統と現在」に関わる様々なテーマに対する，筆者の試論をまとめたものである。本書をプレゼントした，一人の心優しい女性に「感動した！……かな？」と，謎めいた批評の言葉を贈られた。